

校長だより 5 月

子どもを信頼すること

子どもを信頼していろいろなことを任せたいと思っても、いつまでも心配なのが親というもので、私も現在高校2年生の父親で、ただただ過ごしている息子を見て「大丈夫かいな？」と不安をよぎらせる毎日です。

親子の信頼関係はどうあるべきかを東京家政大学子ども支援学部岩立京子教授は以下のように述べておられます。

子どもが自己を認識していく段階になると、親の子に対する信頼感やかかわり方も少し複雑になっていきます。あたたくお世話していけばよかった時期から、本人が自分で苦難を乗り越えられることを信じて、長い目で見守ったり、励ましていたり、時には任せてみたりなど状況に応じた関わりが必要になってきます。

親はこの時期以降、子どもへの信頼感が「私の思い通りに動いてくれる」「私がよくないと思うことはやらない」などの、“親の期待”に添うことへの信頼に、いつの間にかすり替わっていないか、慎重に確認するとよいでしょう。こうした期待が怖いのは、子どもが失敗や挫折をして、親の期待に添えなかったときに「何てことをしてくれたんだ」「そんなことをする子ではなかったのに」という評価になりがちだからです。

これは親が、自分の期待通りにならなかったことへの不快感や怒りを子どもにぶつけているだけで、失敗した子ども自身の身になって考えていません。子どもは、自分の失敗について考えるよりも、親の期待に添えなかった自分を責めるようになります。子どもが失敗や挫折をした時、大事なものは、失敗の結果や原因、対処について子ども自ら考えていくこと。それを親がサポートすることが、親子の信頼を一層強めることに繋がります。

受験などが典型的ですが、合格や達成といった一面的な価値だけを子どもに伝えていくと、失敗や挫折は単に悪い苦い経験だけになってしまいます。しかし、物事を長い目で多面的に見た時の、失敗・挫折の価値や意味を伝えていけば、子どもはやがてリスクがあるチャレンジもできるようになるでしょう。親子でそんな話や議論ができれば素晴らしいですね。「いつかはこの子なりに解決できる」という可能性を信じて、「この子はなんとかやってくれよう」と思えたら、それが伝わり、子どもにとって安心できてうれしい親からの信頼になるのではないのでしょうか。

自分の息子を見て不安になっているのは自分の期待に対する不安であって、子どもの不安ではないのだとこの話を読んでそう思いました。自分の理想を押しつける親にはなってはいないか、ふと自分の言動を顧みる日々です。私もこんな風に考えられるようゆったり自然体で身構えたいものです。